国立公園にみる生物多様性の危機

第2の危機：人間活動の縮小

自然に対する人間の働きかけが減ることによる影響です。

かつて利用されていた里山・里海や草原が利用されなくなり、その環境に特有の生き物が絶滅の危機に瀕する一方で、シカやイノシシなどが分布を拡大し、農林業被害や生態系への影響が生じています。国立公園には、長い歴史の中で様々な人間の働きかけを通じて形成された環境も重要な要素に含まれますが、景観や生態系の維持・再生が課題です。

生活圏に出没するイノシシ

生活圏に出没するイノシシが芝生の公園を掘り返すようになった。

劣化する里海と英虞湾の再生

英虞湾はリアス式海岸の美しい海岸で、真珠の養殖が盛んです。

干潟を干拓して稲作も行っていましたが、今日では耕作放棄が目立ちます。かつて栄養塩類は農地の作物からも吸収され循環していいました。

英虞湾と周辺陸域との人間生活を介した物質循環が途切れたことも英虞湾の底にヘドロが溜まる原因となり、生息する生物種は減少し、生態系の連鎖にも影響しました。

行政、研究者、漁業者、住民等による英虞湾の再生に向けた機運が高まっています。

伊勢志摩国立公園

横山展望台からの英虞湾の眺めは人気が高い。
指定日:1946年（昭和21年）11月
面積:55,544ha
関係県:三重県

伊勢志摩国立公園はリアス式海岸と常緑広葉樹の森が特徴です。真珠の養殖筏、サザエやアワビなどをとる海女の姿、伊勢神宮など悠久の歴史を有する人文的景観が彩りを添え、自然の造った美しさと、人間が創った歴史文化の融合した景観が特色となっています。